

女性のライフコースとその世代間比較

堤 マサエ・加賀美 裕 子

(本学研究生) 平成7年度

A Study of Women's Life Courses and a Comparison of Three Generations

Masae TSUTSUMI, Hiroko KAGAMI

Yamanashi Women's Junior College

The aim of this study is to clarify the changes of women's life courses in rural stem families. We have an interest in how stem family households will continue and change in the traditional Japanese 'Ie'. Also, we have an interest in women in rural society and agriculture. They live and adjust while responding to various changes in society. This paper is an attempt to clarify the aspects of society and family in women's lives.

It could be said that in today's society, one's life is a series of choices. Our lifetime consists of various events. We need to make choices at each event in our lives. It is important how these various events are linked together. Our life course is characterized by the sequence of events in our lifetime. Each person's life course is an individual pathway.

Women's life courses are mainly influenced by the events of marriage, childbirth, and child care. In particular, women's careers will vary according to these events. We analyzed the patterns of women's life courses based on the event of marriage. We wanted to find out how these three generations had changed. The generations to which this paper refers to are those of parents, children and grandchildren. This paper will use the following symbols for each generation: The Mother generation (M) refers to the parents; The Wife generation (W) refers to the child; The Grandchild generations are the Son's Wives (SW) and daughters (F).

The report's findings are given below. We found the Agriculture Continuation type life course had decreased from generation to generation. About 80% of women in the parent generation had not worked (outside the family farm) in the years between their last schooling and marriage. Most people in the parent generation had helped in their family farm. Then, they married into another farm family. This Agriculture Continuation type does not even exist in the grandchild generation now. The child generation was the first generation in which many women worked outside the family after graduating from their last schooling. In contrast to the parent generation, many women in the child generation had various jobs outside the farm. Then, their marriage was a turning point and they quit their outside jobs. Many women in the grandchild generation (son's the wives) followed this same pattern. However, many daughters who are born into farming families work outside the family after graduating from their last schooling, and then become full-time housewives after marriage. It has become common for women in the grandchild generation not to work in agriculture when they are young.

The life course was basically decided for the parent and the child generations, but for the grandchild generation it has diversified. Also, the order of life events isn't necessarily fixed for the grandchild generation. There were both correlation and changes found between society as a whole and individuals. These analyses illustrate that the range of choices available to individuals can vary greatly according to location, social status, etc. The actual state of the time and society is reflected in each person's individual life pathway.

keyword : *life course, pathway, generation, life event, rural stem family, change and continuity, agriculture*

1. 研究目的と分析視点

本稿は農村直系制家族の変動を女性のライフコースの変化から明らかにしようとするものである。筆者らは日本の伝統的な「家」に代表される直系制家族がどのように持続あるいは変容をしているかに関心をもって研究にとりくんでいる。また、とりわけ農村や農業を営んでいる女性がどのような社会の変化や家族の変化、そしてまたさまざまな個人を取り巻く環境に対応しながら一生を生き

ていくかには関心をもっている。ここでは、女性たちの生きてきた実態を通して、社会や家族の変動がどのようなものであったかを明らかにする一つの試みでもある。

生きてきた時代、社会が違えば、価値観、仕事や家事のやり方、子どもの育て方など異なるところである。それぞれの時代を生きてきた人にはそれぞれの実感があり、言い分がある。菅谷よし子著「ササニシキの村に生きて」(コミュニティ) 82には、次のような興味ある文章がある。「サン

ドイッチ世代は、若い頃、昔気質の厳しい姑に仕え抜いてきた。やっと自分の代になったかと思うと、「外に出はって金取りする嫁」にこき使われて小さくなっている。嫁に来た当時も、働いてばかりいて、お金は持たされなかった。今だって変わらない。姑に年金があり、嫁には月給がある。それなのに、「おらたち、働いたって一文にもなんねえの」苦労した後には楽な生活がくる、そう信じていたのに、…」サンドイッチ世代とは時代の移り変わりによって、上と下の世代に挟まれて違った苦労をしている世代のことを強調して表現している。

このようなサンドイッチ世代の女性たちの生活はどのようなものだったか。かつて、この世代が結婚をした時は農業が中心だった。自らも農業に励み、昔の姑に仕えた。今度は長男が結婚をして、嫁が来て、自分が姑になる。姑になれば、嫁は頼りなくて情けなく思える。嫁には嫁の気苦労がある。しかし、今の嫁は、時代が変り、柔軟な考え方をする自分たち姑世代と暮らし、家事も子どもの世話も姑に任せて勤めにでる。今の嫁は誰もが楽だと言うが、嫁の立場からすると、勤めはまた、大変なのである。今も大姑は健在である。大姑が自分の年齢の時は、楽隠居をしていたと思うが年寄りの世話と勤めに出る息子夫婦の家事と子どもの世話に明け暮れ、いつ楽になるとも予想がつかない日々を過ごす。嫁という立場と姑という立場をもつサンドイッチ世代はまた、その両方の立場がわかる世代でもある。今の姑は理解がある。いや、少なくとも表面では理解を示そうとしている。自分がした苦労をわかってほしいと思いながら、それを口に出すといやがられるから、黙っている。サンドイッチ世代は辛い、我慢強くなければ生きていられない。それぞれの世代には世代独自の生き方、考え方があり、大きな変動の波にさらされてきたサンドイッチ世代と自覚する一群の女性たちもまた、その時代を特徴づける人たちなのである。ここでも、子世代がこの世代にあたる。

このような異なった世代の女性の一生のあり方を後づけることにより、たとえば、同じ嫁の立場でもどこが変り、どこが変わらないか、を見出すことが可能であると考え。ライフコースの視角から女性の世代間比較をすることによって、ライフコース・パターン変化の様々相が浮び上がってくればと期待する。家族におけるライフコース研究

の意義や展開は先達の研究に学ぶとして、ここでは、実際の資料を手がかりに家族の変動の一部分を見出してみたい。小さな窓から広い野原や遠い山々をみるようなものかもしれないが、家族研究にはこのような視点は重要な課題の一つであると思われる。

人生50年代から人生80年代と言われて久しい。走り方と言えば、短距離から長距離の走り方に切り換えなければ、長い距離を十分走りきれない。単純に考えても、人生50年時代と人生80年時代とは人々の生涯の過ごし方が違う。そして、人々の行動を支える規範が強い時代とさまざまな選択肢の中から選んでいく時代とは人の一生の過ごし方が異なる。今日、人の一生は選択の繰り返しといってもよい。私たちの一生はさまざまなイベントからなっている。そのイベントごとに選択をしていかなければならないと言ってもよい。幼い頃の選択は親の意図するところが大きい。生まれる場所からはじまり、幼稚園、保育園、学校、そしてどのような仕事につくか、どのような配偶者がよいか、どのような家庭生活をしたいか、そのためには子どもを何人、どのような間隔で欲しいか、などさまざまである。人生はこのイベントがどのように連なっているかが重要である。ライフコースというとらえ方はそれぞれの人の一生を一連の連鎖として考えるところに特徴がある。それは、個人が生涯をどのように生きていくかの道のり(pathway)としてとらえられている。寿命が伸びると一生をより計画的に生きることが必要になってくる。こうした意味でもライフコースに視点をあて家族の変動に迫ることは有効である。

女性のライフコースは結婚、出産、育児などのイベントに大きく影響される。とくに、女性の就業はこのようなイベントがどのようにあるか、によって異なる。ここでは、結婚のイベントを基礎におきながら、その前後のライフコースパターンを見出し、世代間の変化をみてみる。ここでの世代(generation)は親子孫の三世代であり、一般的に言う概念とは異なる。ここでは、母世代(M)が親世代、妻世代(W)が子世代、息子の妻世代(SW)あるいは娘世代(F)が孫世代と位置づけている。以下で言う親、子、孫世代はこのような女性の世代である。

この対象のほとんどは果樹農家であった。その

ため、結婚することは、すなわち農業をするということ、と考えられていたが、今もはたしてそうなのか。世代によってどのようにその様相が異なるか、をみってみる。農業が家業であり、家族経営である場合、そこに生きる女性が結婚することは農業をすることでもあった。そこでは「家庭か職業か」ではなく「家庭と職業と」である。二者択一から二者、すなわち同時的家庭と職業型だったとみてよい。はたしてそのようなライフコースが一般的と言ってよいのか。よく言われる専業主婦型、結婚退職型、出産退職型、中途就職型、中断再就職型、職業継続型はどのようなヴァリエーションになるのか。農業を営む女性たちのライフコースはどのように多様化しているか。多くの女性が結婚前には就業経験をするようになってきたと言われているが、農家の女性たちはどのような就業経験をしているか、などを見てみたい。

本稿のデータは、森岡清美先生（東京教育大学名誉教授）の指導のもとに行われた反復調査の結果をもとにしている。この収集方法や対象地については、すでに筆者執筆本紀要 NO.16 号「農村直系制家族の変動と展開」（60 - 61 頁）にあるため、省略する。さらに、1994 年 10 - 11 月に対象世帯の女性にたいして家事、育児、就業状況などを中心とするライフコースの調査をおこなった。ここでは、これらのデータを合せて分析する。

なお、分析対象とする女性の生年は次のようである。

親世代：母（M）1882 年（明治 15）から 1913 年（大正 2）生まれ 108 ケース

子世代：妻（W）1921 年（大正 10）から 1942 年（昭和 17）生まれ 108 ケース
平均年齢 63.2 歳

孫世代：息子の妻（SW）1947 年（昭和 22）から 1967 年（昭和 42）生まれ 36 ケース、平均年齢 36.4 歳

この場合、婿養子をもらった跡とりの娘も含む

娘（F）未婚、既婚を含めて 122 ケースあったが、ここでは既婚のみとする。この場合、1949 年（昭和 24）から 1970 年（昭和 45）生まれの 85 ケース、平均年齢 38.5 歳

平均年齢は 1994 年時点のものである。母世代はすでに死亡しているケースが多く 82 歳以上（1994 年時点）である。以後の集計においては、いくつか不明、非該当がある。今後、確認作業をして、多少の修正が必要なものがあるかと思われることを断っておきたい。

2. 最終学校終了から末子出産までの 三世代比較でみた女性のライフコース変化

まず、女性の生涯における大きな選択である次の①最終学校終了、②結婚（初婚）、③長子出産、④末子出産の主な出来事について、経験年齢、その状況などの三世代比較を行い、その変化と特徴を考察してみよう。

1) 最終学校終了

最終学校の終了は、若い世代ほど年齢が遅く、高学歴になっていることが明らかである。（表 1）

親世代（M）の最終学校終了の年齢が 12 - 15 歳、小学校、中学校卒ではほぼ 9 割である。学歴なしというのが 3 ケースある。高校卒以上は 1 割にもならない。それにたいして子世代（W）は 15 - 18 歳と上昇し、中学校、高校が 9 割になっている。孫世代（SW）（F）は、8 割以上が 18 - 20 歳、高校、短大卒であり、親や子世代には見られなかった 22 歳、大学卒が 1 割ほどいる。そして、中学卒はわずか 1 ケースである。最終学校終了が 20 歳をこえ、短大、大学卒が半数であることは、孫世代において高学歴化が進んだと見ることができる。一般的傾向を見ても、20 歳代では 20 歳、30、40、50 歳代で 18 歳、60 歳代で 17 歳と、年齢が低いほど最終学校終了年齢が高くなっている。この対象の親世代年齢はさらに高く、70、80、90 歳におよんでいる。この親世代が生まれ学校教育を受けた明治時代は、教育制度が今とは異なり、義務教育を受けることがようやく一般化してきた時代であった。親世代のほとんどが 15 歳で、子世代では 18 歳で、そして孫世代は 20 歳というように教育期間が伸びていることは、一般的傾向と合せ、さらに上の世代との変化を見ることができる。その社会的背景としては、教育制度のあり方、経済水準、産業構造の高度化などの関連が考えられよう。

	M		W		S W		F	
0	3	2.8 %	0	0.0 %	0	0.0 %	0	0.0 %
1	48	44.4 %	7	6.5 %	0	0.0 %	0	0.0 %
2	46	42.6 %	40	37.0 %	1	2.8 %	1	1.2 %
3	10	9.3 %	56	51.9 %	13	36.1 %	33	38.8 %
4	1	0.9 %	4	3.7 %	16	44.4 %	44	51.8 %
5	0	0.0 %	0	0.0 %	4	11.1 %	7	8.2 %
6	0	0.0 %	1	0.9 %	2	5.6 %	0	0.0 %
計	108	100.0 %	108	100.0 %	36	100.0 %	85	100.0 %

0：学歴なし

1：小学校（尋常小学校）卒

12 歳

2：中学校（旧高小、新中）卒

15 歳

3：高校（旧中、高女、新中）卒

18 歳

4：短大、旧高専、専門学校、看護学校卒

20 歳、21 歳

5：大学以上

22 歳

6：不 明

表1 最終学校卒業年

2）結婚（初婚）と夫との年齢差、通婚圏

平均初婚年齢は、親世代が 22.9 歳、子世代が 24.8 歳、孫世代が 25.6 歳である。明らかに、結婚年齢は親、子、孫と世代が若いほど、遅くなっている。これは、最終学校終了年齢と関連している。親世代では、10 代で結婚しているケースが 10 ケースあるのにたいして、子世代は 1 ケース、孫世代は皆無である。これにたいして 30 代の結婚は若い世代に増えている。この対象の親世代の最も多い結婚年齢は 23 歳（19 ケース）、最も早い結婚は 17 歳、最も遅い結婚は 31 歳である。同様に、子世代の最も多い結婚年齢は 26 歳（20 ケース）、早い結婚は 19 歳、遅い結婚は 33 歳、孫世代の最も多い結婚年齢は 25 歳（9 ケース）、早い結婚は 20 歳、遅い結婚は 31 歳である。孫世代になって、最も多い結婚年齢が分散化しており、適齢期意識の変化とみてよいかどうかはこれのみでは明確ではないが、上の世代とは異なる傾向を示している。

ところで、「結婚の時期」について、早いか、ちょうどよいか、遅いと感じていたか、について子世代（W）と孫世代（S W、F）にきいたところ、子世代は約 7 割、孫世代（S W）は約 8 割、（F）は約 7 割がちょうどよい時期と答えている。早かったと思っているのは、子世代（W）に多く、約 2 割弱である。また、妻は娘（F）の結婚は遅

いと感じている割合（1.6 割）が自分や息子の妻よりも多い。

夫との年齢差は親世代 4.6 歳、子世代 3.7 歳、孫世代（S W）1.5 歳、（F）2.2 歳である。若い世代ほど、夫との年齢差は小さい。また、若い世代ほど、同年の夫が多いが、その差も大きく、夫婦の年齢差 15 歳というケースもある。親世代で最も多いのは 5 歳差（16 ケース）、子世代では 3 歳差（22 ケース）、孫世代は差なし（S W：3 ケース）（F：11 ケース）である。このように、若い世代ほど、夫婦の年齢差は小さくなっている。これも一般的傾向と同様である。

通婚圏については、表 2 のようである。親世代では、同じ地区内、町内が約 4 割、子世代では約 3 割、孫世代 S W は 2 割、F は 1 割と若い世代ほど同じ町内の結婚は減っている。これに対して、隣接外の県内地域や県外の割合が、親世代で 2 割、子世代で 4 割、孫世代で約 7 割と増加し、世代が若いほど通婚圏が広がっていることを示している。このような通婚圏の広がりは見合いか恋愛かの配偶者選択の方法や、女性の社会移動、職業の持ち方などとも関連している。親世代では約 8 割が同じ町内か隣接の市町村からきていたが、子世代では約 6 割になり、息子の妻や娘は約 3 割である。しかしなお、同じ県内の範囲は息子の妻が 8 割、娘は約 7 割になる。

	M		W		S W		F	
区	18	16.7 %	6	5.6 %	6	16.7 %	8	9.4 %
町	23	21.3 %	24	22.2 %				
隣	45	41.7 %	35	32.4 %	4	11.1 %	18	21.2 %
県	19	17.6 %	38	35.2 %	14	38.9 %	27	31.8 %
県 外	3	2.8 %	5	4.6 %	6	16.7 %	27	31.8 %
不 明	0	0.0 %	0	0.0 %	6	16.7 %	5	5.9 %
計	108	100.0 %	108	100.0 %	36	100.0 %	85	100.0 %

区：町内でも地区も同じケース

町：勝沼町内（地区以外の町内）

隣：勝沼町に隣接する4つの市町村（塩山市、山梨市、大和村、一宮町）

県：隣接する市町村を除く県内の地域

県外：山梨県外の出身者

表2 通 婚 圏

3) 長子出産年齢と末子出産年齢、育児期間、 子どもの数

平均長子出産年齢は親世代が24.3歳、子世代が26.1歳、孫世代（S W）26.7歳、（F）26.8歳である。対象のなかの最も多い年齢は、親世代24歳（11ケース）、子世代25歳（19ケース）、孫世代26歳（S W、F共に、11ケース）である。最も若い年齢は、親世代18歳、子世代19歳、孫世代23歳である。最も高齢な長子出産は親世代32歳、子世代35歳、孫世代31歳であった。このように、若い世代ほど年齢が高くなっている。

次に、末子出産年齢をみて、出産期間を比較してみよう。孫世代はまだ子どもを産み終えているとは限らないので親世代と子世代についてみる。親世代の平均年齢は37.4歳、子世代は30.9歳である。かなり差がある。対象のなかでも最も多いのは、親世代は41歳（13ケース）、子世代は31歳（16ケース）と10歳のひらきがある。もっとも高い年齢は親世代48歳、子世代41歳であった。子世代は親世代に比べて長子出産年齢は高いが、末子出産年齢は低い。

では、出産期間はどれくらいの差があるだろうか。親世代は平均13.4年、子世代は4.7年であった。最も多いのは、親世代は15年（11ケース）、子世代は4年（20ケース）である。最も出産期間が長い場合は、親世代25年、子世代14年である。このように、親と子世代でその年齢に大きな差が生じてきている。これは、言うまでもなく子

どもの数の違いとして現れている。

平均子どもの人数は親世代は5.91人、子世代は2.61人である。親世代の上の祖母世代でも平均は5.79人でむしろ少ない。親と子世代で大きな差がでてきた。多産多死から多産少死へ、そして少産少死への時代変化を親世代と子世代が生きてきたようにみられる。そして、子どもの世話は子世代では母に見てもらったというのが7割であるのにたいして、孫世代は保育園に預けるが7割であった。もちろん、今、自分で子育てをしている女性もいる。親世代も子世代もそして孫世代も同じように同居をしていても子どもの育て方が変わってきたとみてよいかもしれない。このように、子どもをめぐっては、親世代から子世代で人数が減り、子世代から孫世代で育て方が変わってきたようである。

以上、最終学校終了、結婚、長子出産、末子出産年齢の分析から浮び上がってきた三世代の女性のライフコースは次の図1のようである。

3. 職業・農業経歴と家事労働を中心とする女性のライフコースパターン

ここでは農家女性のライフコースを農業経歴を中心に、職業、家事労働との係わりあいパターン化して検討をしてみた。とくに、結婚前の農業や職業の持ち方と結婚後の農業労働の従事の仕方に注目をして、パターン化を試みた。三世代にわたる女性の職業の持ち方はパターン化できないく

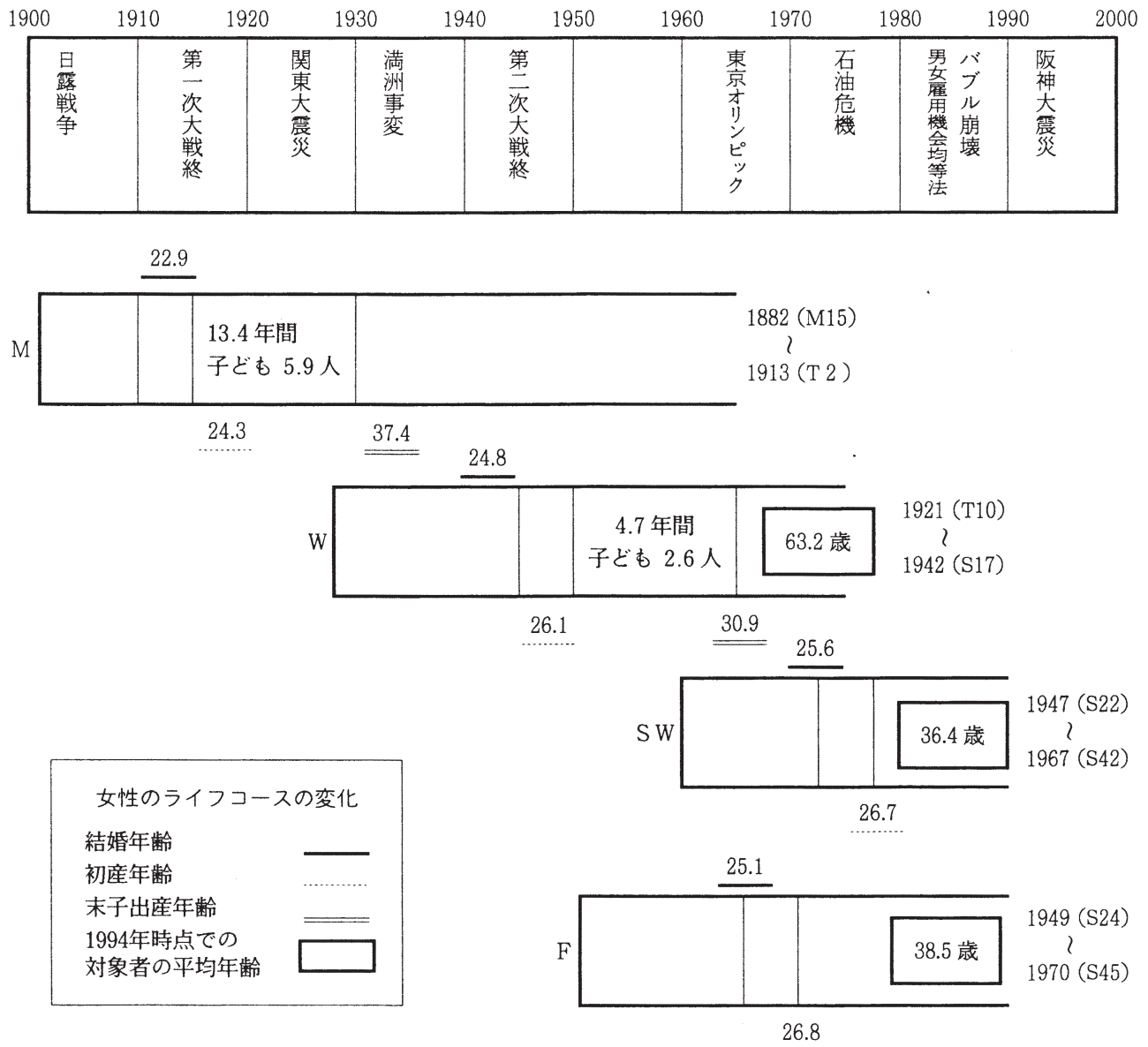


図1 三世代の女性のライフコース

らい多様化をしているが、まず、分析のために、結婚前と後に分け次のように分類した。

結婚前－結婚後

農業：1－①

勤務：2－②

家事：3－③

無職：4－④

(学校)

たとえば、結婚前に家事を手伝いながら農業をし、結婚後は農業に主として従事していた場合は、13－①と表す。結婚後はほとんどの女性は家事労働に従事しているが、専業主婦のみ③で表すことにする。ここではほとんどが農業であるが、商業のような自営業も若干含まれる。分類をする上

で、農業のところは商業などの家業も含むものとした。

1) 親世代のライフコースパターンの特徴と事例

まず、親世代の主なライフコースパターンは次の三つが見出せた。

13－① …… 74 ケース [農業継続型]

2－① …… 27 ケース [職業中断農業従事型]

3－③ …… 6 ケース [専業主婦型]

合計 107 ケース、(1 ケース不明)

[13－①]パターン[農業継続型]は、結婚前に農業の手伝いをしながら、家事労働をし、結婚後すぐに農業に従事した。親世代はこのパターンがほとんどである。

〔2-①〕パターン〔職業中断農業従事型〕は、結婚前は勤務をされていて、結婚後は農業に従事した。その仕事の内容は女工19、女中3、教師3、事務1、助産婦1、である。

〔3-③〕パターン〔専業主婦型〕は、結婚前の職業はない。少しは親の農業の手伝いをしていたと思われるが、無職という。結婚後は家事労働のみのパターンである。

以上の三つのパターンの典型的な事例をとおして、親世代のライフコースの特徴を見出してみよう。

〔農業継続型〕世帯番号78、家族形態の変化

(N-N, F-N, N, N)

1903年(明治36年)、3人きょうだいの長子として塩山市に生まれた。親の職業は農業であった。12歳で最終学校を終了し、農業を手伝い家事労働もした。夫(29歳、農業)と24歳で見合い結婚をするまで12年間、農業を手伝う。結婚して、すぐに農業に従事した。26歳(長女)、28歳(長男)、33歳(二女)、34歳(三女)、36歳(二男)、40歳(四女)、42歳(五女)と7人の子どもを産んだ。長子出産から末子出産までの期間は18年、その間、29歳の時、義母が84歳で死亡、36歳の時、義父が87歳で死亡した。29歳の義母が亡くなってからは、家事労働は中心になってすることになった。56歳で跡継ぎが結婚し、嫁にほとんどの家事労働を任せた。洗濯はそれぞれの世代のものをし、ときどき、孫のめんどろをみた。6子が結婚をして出て行く前の63歳には8人家族(N-N)、2人の娘が同居、農業経営面積8.5反であった。末子の5女が結婚して転出したのが66歳、農業を引退したのが69歳、ちょうど石油ショックの前の年(S.47)であった。そして、農業を引退して5年後(1977年、S.52)に死亡した。農業は12歳の時から69歳まで、57年間継続をし、その間7人の子どもを産んで育て、長子を産んで末子が結婚するまでの子育て期間は40年間であった。

〔職業中断農業従事型〕世帯番号32、家族形態の変化(C-N, C-N, M-N, M-N)

1904年(明治37年)、6人きょうだいの二番目として山梨市に生れた。親の職業は商業であった。

18歳で最終学校を終了し、小学校の教師となった。7年間教師をし、その間西桂町で4年間下宿をした。25歳の時、30歳の夫(農業)と見合い結婚をした。結婚をして、教師をやめ、農業に従事した。26歳(長女)、27歳(長男)、29歳(二男)、31歳(三男)、33歳(四男)、35歳(五男)と6人の子どもを産んだ。長子出産から末子出産までの期間は9年間、その間三男が生まれた31歳の時、義父が66歳で死亡した。それまで、日用品の購入などの財布は義母が持っていた。献立や洗濯などの家事労働はしていた。義母が死亡したのは84歳、53歳(1957年、S.32)の時、神武景気で高度成長にさしかかった頃であった。そして、3年後の56歳の時、跡継ぎが結婚をした。嫁が来てから、献立などの家事は補助的にするが、日用品の支出や決定は行っていた。1966年(昭和41年)調査時点では、経営面積7.6反、親世代(2人)と子世代(夫婦と子ども2人)の6人家族であった。子ども世代とは同居をしているが、自分たちの部屋をそれぞれに持っていた。家事労働は自分たちの世代のことは自分たちでしていた。夫は81歳(1980年、S.55年)で死亡した。その時は76歳であった。その後もできる限り農業をし、1992年調査時点(88歳)では引退していた。25歳から80歳ぐらいまで55年以上の間、子どもを産み、育て、家事労働をしながら農業労働をしてきた。もちろん、主に農業を担ってきた期間と補助的な期間の係わり方には違いはある。跡取りが結婚をした時、既に他の子どもたちは転出しており、子育て期間は長子出産の26歳から跡取り結婚の56歳まで30年間とみられる。

〔専業主婦型〕世帯番号31、家族形態の変化

(C-N, C-N, M-N, M-N)

1903年(明治36年)、4人きょうだいの長子として勝沼町に生まれた。親の職業は農業であった。15歳で最終学校を終了して、職業は持たなかった。27歳の時、同年(27歳)の夫(農業と自営業)と見合い結婚をした。そして、その同じ27歳で長女を、28歳(長男)、29歳(二男)、30歳(三男)、32歳(二女)、33歳(四男)と、27歳から33歳のわずか6年の間に6人の子どもを産んだ。二男を産んだ29歳の時、義母が73歳で死亡している。末子を産んだのは昭和10年であっ

た。跡継ぎが結婚をしたのは54歳(昭和33年)の時である。その後、家事労働も手伝いとなり、嫁が末子を産んだのは60歳の時であり、その時から、家事権を嫁に全面的に渡し、ときどき孫の世話をするのみとなる。親世代と子世代は同じ棟の上と下に別れて住み、トイレ、テレビは別々であった。70歳の時、自宅で民宿を始めた。72歳で夫(72歳)が死亡した。1992年の調査時点で89歳である。

以上の事例で観察したように、親世代では、学卒から結婚するまで、外に働きに行くことはせず、家事労働の手伝いをしながら農業をしていた人が約8割である。結婚前に勤務した人(2割)は多くが女工(19ケース)であった。これは「家」の家計を助けるためのものであった。結婚後、外で勤務する人はいない。家事は結婚後家計以外はすぐ任されることが多い。親世代の生きた時代は、関東大震災、太平洋戦争を経験し戦後の貧しい時代を生き抜いてきた。子育てをほぼ終わる頃、高度経済成長の時代であった。そして、その後の時代に老後を生きている。

12-15歳で学校を終え、農業と家事の手伝いをする。そして、20歳前後で見合いをして、結婚をする。結婚すると、農業に従事して、家事労働もしながら、子どもを5-6人産んで、上の世代を見送る。50歳過ぎで跡継ぎが結婚をして、同居をする。夫の死まで、孫の世話をしたり、家事や農業の手伝いをして過ごす。ほとんど、きめられたライフコースである。

2) 子世代のライフコースパターンの特徴と事例

まず、子世代の主なライフコースパターンは次の四つが見い出せた。

- 13-①……40ケース [農業継続型]
- 2-①……60ケース [職業中断農業従事型]
- 3-③……2ケース [専業主婦型]
- 2-②……2ケース [職業継続型]
- 4ケース [その他]
- 合計 108 ケース

子世代は親世代に比べると、結婚前に仕事をもって社会で働く女性が半数以上になった。その職種も店員、事務員、公務員などさまざまである。親世代で多かった農業を手伝いながら家事労働をする場合も洋裁、和裁、華道などの習いごとをする

ようになっている。専業主婦型、職業継続型は少ない。

以上の四つのパターンの典型的な事例をとおして、子世代のライフコースの特徴を見出してみよう。

[農業継続型] 世帯番号 62、家族形態の変化

(C-N, C-N, C-N, C-C-N)

1933年(昭和8年)、隣町一宮町で、三人きょうだいの長子として生まれた。親の職業は農業であった。最終学校を18歳で終え、家業である農業を手伝う。学生時代の友人である夫(農業、21歳)と21歳(1954年、S.29)のとき恋愛結婚をした。そして、22歳で長女、25歳で長男を産んだ。結婚前の家業手伝い(3年)、出産期間も3年と短い。結婚の時期は早いと感じていた。農業は子育てが終わるまで、手伝う程度の従事であった。子育ても保育園、姑にもみてもらった。末子が生まれて1年後ぐらいから、日用品や家事は主として妻(W)がするようにはなったが、世代で分けるようになった。長女が43歳(1976年、S.51)の時、結婚して転出、長男が49歳(1982年、S.57)の時、結婚をして、同居をする。親世代とは別であったが、一緒に生活をするようになり、息子夫婦とは別棟に住み、食事、日常のことも別にする。1992年(平成2年)調査時点の家族人数は8人(C-C-N)である。農業労働は園芸ものの栽培など跡取りである息子に従って、手伝う。息子の妻は小学校の教師であり、農業はしていない。1954年に結婚してから1997年の今日まで、43年間親世代と暮らし農業を営んできた。子育て期間は長女が生まれて息子が結婚するまで、27年間であった。

[職業中断農業従事型] 世帯番号 18、家族形態の変化 (C-N, C-N, M-N, M-C-N)

1933年(昭和8年)、隣村の大和村で、6人きょうだいの2番目として生まれた。親の職業も農業であった。18歳で最終学校を終了して、5年間裁判所に勤務した。23歳(1956年)の時、4歳年上の夫(農業、27歳)と恋愛結婚をした。結婚後すぐ農業に従事したが、翌年(S.32)24歳で長男が生まれた。そして、28歳(S.36)で二男、30歳(S.38)で長女が生まれた。出産期間は6年

間であった。その後、16年間、家族形態は親夫婦と子ども夫婦に子ども3人の7人家族が続いた。1977年(S.52)に義父が死亡した。義母はこれを機に家事労働からは引退をした。1985(S.60)年、52歳のとき跡取りが結婚をして転入した。その時から、家事労働は息子の妻と二人で行うようになった。翌年、53歳(1986年)で、長女が結婚して、子どもが3人とも出て行き、29年間の子育て期間が終わった。息子の妻も勤務を辞めて農業に従事している。結婚(1956年)してから1997年の今日まで41年間義母と暮らし、農業に従事してきた。今は、跡取りである長男の指示にしたがって農業をし、ある程度は世帯分離しながら同居をしている。

〔専業主婦型〕世帯番号39、家族形態の変化

(C-N, N, C, C)

このパターンは学卒と同時に結婚をして、農業労働はせず、家事労働を中心に過ごしているものである。しかし、少しのパート的な仕事はしているパターンを含んでいる。わずか2ケースの一つである。

1931年(昭和6年)、3人きょうだいの3番目として、石和町に生まれた。親の職業は事務職であった。18歳(S.24)で最終学校を終了して、恋愛結婚をした。夫は竹細工職人で、24歳であった。結婚の時期は少し早いと思った。結婚して、家事労働をするのみであった。19歳(長男)、22歳(二男)、26歳(三男)の時、それぞれが生まれた。出産の期間は7年間であった。義母にも世話をしてもらったが、家事と子育てをしていた。36歳から56歳まで、学校の給食の手伝いをした。その間、40歳の時(1971年、S.46)、親世代が夫のきょうだい(妹)のところへ転出した。翌年(41歳の時、1972年、S.47)子どもが転出しはじめる。そして、50歳の時は夫婦のみとなる。52歳(1983年、S.58)の時、義父が90歳で死亡した。63歳で夫(69歳)が死亡、1992年調査時点では死亡したばかりであった。経営面積がなく、農業を営むことがないため、人の移動が比較的しやすいようである。義母はその時点で帰っていた。

〔職業継続型〕世帯番号61、家族形態の変化

(C-N, C-N, F-C, N)

1930年(昭和5年)、4人きょうだいの4番目として、白根町で生まれる。親の職業は農業であった。20歳で最終学校を卒業して、地方公務員(県職員)になり、51歳で退職するまで31年間勤務した。結婚は26歳(1956年、S.31)のとき、兄の後輩の夫(教師)と恋愛結婚をした。結婚の時期は、ちょうどよいと思っていた。28歳(1958年)に長女、30歳(1960年)に長男を産んだ。出産期間はわずか2年であった。子育ては保育園と義母に頼んだ。46歳(1976年)の時、義母が72歳で死亡、長女が転出した。義母が死亡するまでは、家事は分担していた。51歳(1981年)では、あとの子どもが転出して、義父と夫婦の3人だけになった。53歳(1983年)に、長女が結婚、55歳(1985年)の時、義父が東京の病院へ行くため、転出をした。62歳(1992年)に長男が転入し山梨中央銀行に勤務、同居する。妻が勤務を継続できたのは、経営面積が少ないこと、義父が農業をするのみで、義母が子育て、家事の多くを分担してくれた、という状況があった。

このように、妻たちは小さい頃から思春期ごろに第二次世界大戦を経験し、戦後の混乱期を経て、働きざかりのころに高度経済成長を経験している。さまざまな物が溢れ、子どもには高い学歴をつけなければならない時代に出会うことになる。親世代とは完全な同居をしていたが、下の世代とは同居の形をとりながらも、別棟や上下で世代間の分離をしながら調整している。いわゆる上と下に挟まれたサンドイッチの世代ともいえよう。

3) 孫世代のライフコースパターンの特徴と事例

孫世代の主なライフコースパターンは子世代と異なり分類が困難なくらい多様になってきた。それぞれに異なるくらいであるが、上の世代との比較を考慮して分類すると、つぎのような四つになった。

息子の妻(SW)について

- 2 - ① …… 18 ケース [職業中断農業従事型]
- 3 - ③ …… 1 ケース [専業主婦中断就業型]
- 2 - ② …… 1 ケース [職業継続型]
- 2 - ③ …… 9 ケース [職業中断主婦型]
- 7 ケース [その他、不明]

合計 36 ケース

娘 (F) について

2 - ① …… 6 ケース [職業中断自営・

農業従事型]

3 - ③ …… 3 ケース [専業主婦型]

2 - ② …… 9 ケース [職業継続型]

2 - ③ …… 52 ケース [職業中断主婦型]

2 - ③② … 6 ケース [職業中断再就職型]

9 ケース [その他、不明]

合計 85 ケース

これを見ると、上の世代にはなかった職業中断主婦型や職業中断再就職型が現れてきた。専業主婦型についても、上の世代は結婚前には家事労働が中心とはいえ、少しの農業労働をしてきた。ところが、孫世代になると、家事労働が中心の専業主婦はほとんどいなくなった。また、人数も少ない。息子の妻にある専業主婦中断就業型は大学を卒業して、すぐ結婚をし専業主婦を3年して、その後子どもを3年の間に2人産み、28歳から小学校の教師に就業している。いままでにないパターンである。イベントの順序が今までとは異なるケースが出てきた。職業継続型について、息子の妻は1ケースのみである。娘は9ケースある。また、職業中断再就職型が娘に現れている。これは農家がほとんどである息子の妻のライフコースではなく、働く現代女性に多くある一般的なパターンである。孫世代は息子の妻が50 - 30歳、娘が48 - 27歳の年齢幅であるため、まだ出産や子育ては終了していない。しかし、今みたように、職業の持ち方、ライフイベントの順序、イベントの年齢には上の世代とは異なる傾向が見出せた。以下簡単に、代表的な事例を観察してみる。

息子の妻 (SW) について

[職業中断農業従事型] 世帯番号 46、家族形態の変化 (C - N, C - N, M, W - N)

1958年 (昭和33年)、浜松市で生まれた。2人きょうだいである。20歳で最終学校、短大を出て、4年間銀行に勤務した。24歳 (1982年) に同年の夫 (農業) と結婚をした。そして、勤務を辞めて、すぐ農業に従事した。家事も義母と分担した。まもなく、26歳で長男、31歳で長女を出産、子どもは保育園と義母にみてもらった。いまのところ子どもは2人、この出産期間は5年であ

る。経営面積は11反、夫を中心に農業を営んでいる。

[職業中断主婦型] 世帯番号 87、家族形態の変化 (C - N, C - N, M - F, F - N)

1964年 (昭和39年)、甲府市で生まれた。2人きょうだいであった。専門学校を20歳で卒業して、4年間医療事務の仕事をした。24歳 (1986年) で、夫 (25歳、スポーツ店店長) と結婚した。25歳 (1987年) で長女、27歳 (1991年) で二女を産んだ。出産期間はいまのところ2年間、子育ては自分でしているが、保育園へやり、無理のない仕事 (パート) にでようと考えている。家事は親世代と分担している。経営面積は2.6反で兼業農家である。

息子の妻のほとんどが最終学校を卒業すると、仕事に就き結婚で家事をするか農業かに分れ、経営面積の少ない世帯や商家は勤務するか自営の仕事をする。結婚しても仕事を継続することはほとんどない。生活の面では敷地内で別棟に住んだり、一階と二階に住み分けたりと世代間分離をしている。

娘 (F) について

[職業中断自営・農業従事型] 世帯番号 30、家族形態の変化 (C - N, C - N, C - N, F - C)

1958年 (昭和33年)、4人きょうだいの長女として農家に生まれた。21歳 (1979年) で専門学校を終了して、検査技師を自宅から7年勤める。28歳 (1986年) で夫 (29歳、自営業) と結婚をして、勤務をやめ、自営業の手伝いをする。29歳 (長女)、32歳 (長男) で2人を産む。今のところの出産期間は3年、育児は自分で世話をしているが、保育園にもあずけ、義母にもみてもらう。家事、育児をしながら自営業をしている。

自営業の夫と結婚をした娘は、いずれも仕事を辞め自営業をしている。しかし、農業は少ない。最も多いのは、つぎの職業中断主婦型である。

[職業中断主婦型] 世帯番号 77、家族形態の変化 (N - N, C - N, C - N, M - C - N)

1964年 (昭和39年)、2人姉妹の妹として生まれた。親の職業は農業である。現在は神奈川県に住んで、主婦である。22歳で大学を卒業して、

会社の研究室に3年、老人ホームに1年、勤務した。大学は埼玉県にあった。会社員の夫と27歳（1991年）で結婚し勤務を辞める。母親は娘の結婚年齢はちょうどよいと思っている。その翌年、28歳で長子、30歳で二子を産む。現在は家事をしながら子育てをしている。

〔職業継続型〕世帯番号23、家族形態の変化

(N-N, F-N, F-N, F-N)

1965年（昭和40年）、2人姉妹の長女として、農家に生まれた。20歳（1985年）で短大を卒業し、銀行（日銀）に勤務する。25歳（1990年）で同年齢の司法書士である夫と結婚し、塩山市に住む。翌年26歳で長子を産む。子どもは保育園に預け義母がみている。現在も勤務しながら、家事、育児は義母と分担している。まだ、出産期間は終わっていない。

その他、〔専業主婦型〕や〔職業中断再就職型〕がある。専業主婦型では、学校を卒業して、洋裁学校へ行き、また、転入をして家事手伝いをし、結婚するような例があった。職業中断再就職型では、結婚前の仕事を辞めて、主婦になり、家事と子育てをして、再び勤務につくパターンである。その場合の勤務はほとんどパートである。この孫世代は豊かな時代に生まれ、高学歴化が進み、女性も社会に出て働くことが一般的になった。農家では、子育てや家事をしながら、家業である農業を手伝っているが、まだなお、農業以外の職業継続型や再就職型が多いとは言えない。かわいい子どもを預けて外へ働きに行きたいという意識はそれほどないのか、子どもが小さい頃は自分で世話をするという意識は強い。

4. 変りつつある女性の生き方

—— 結びにかえて ——

農村・農家に生きる女性のライフコースに焦点をあて、世代によってどのようにライフイベントやその年齢が異なるかをみてきた。人は誰でも生まれてきたら、時間の経過にしたがって成長、発達をし、だいたい同じような年齢で同じような営みをして、老いて死でいく。今、一般的に言われる女性のライフコースは、都市に人口が多いこともあり、都市の勤労者家族の女性の姿である。こ

こで見たように、農村や農業を営む女性たちは、また少し違った。戦後、「家」制度の変化によって女性の地位やあり方が大きく変わったと言われる。確かに、データでみると少しずつ変っている領域、大きく変っているところ、あまり変わらないところがある。ミクロな、このような見方も重要である。またなお、女性が生きた事実から、具体的には自分の親や祖父母、子どもや孫と言うそれぞれの時代を生きた、そして生きている人達の実態から、その変化を探ってみることも意味のある方法であった。それをここでは世代間比較で試みた。多くの人は、自分の親は自分の今の年齢の時どうしていた、というように親の人生と自分とを照らし合せて考えるものである。ここで、見い出せた世代間の職業の持ち方、家事労働のあり方を中心とするライフコースのパターンを比較すると次のようである。

世代間比較でみたライフコースパターンの変化

	世代			
	親	子	孫	
	M	W	SW	F
〔農業継続型〕	74	40	0	0
〔職業中断農業従事型〕	27	60	18	0
〔専業主婦型〕	6	2	0	3
〔職業継続型〕	0	2	1	9
〔専業主婦中断就業型〕	0	0	1	0
〔職業中断主婦型〕	0	0	9	52
〔職業中断自営・農業従事型〕	0	0	0	6
〔職業中断再就職型〕	0	0	0	6
〔その他〕〔不明〕	1	4	7	9
合計	108	108	36	85

すでに分析をしたところを、上の整理した表にしたがってまとめると次のようである。

世代間の比較でみると、明らかに農業継続型が減っている。親世代では最終学校の終了から結婚までに仕事を持たない人は8割いた。ほとんどが農業を手伝っていた。そして、農家に嫁いだのである。今の孫世代にはそのような人はいない。学卒と同時に仕事を持つようになったのは、子世代になってからである。子世代は親世代と逆転して外で仕事を持っていた人のほうが多い。そして、結婚が転機となって職業を辞めるのである。孫世

代でも跡継ぎの妻はこのケースが多い。ところが、農家に生まれた娘は学卒で職業を持って、結婚すると専業主婦になる人が多い。今後、子育てが終わるとまた、就業する可能性もあらうと思われるが、跡継ぎの妻にも職業中断主婦型が9ケースある。孫世代では若い頃は農業はしないことのほうが一般的になってきた。

親や子世代では決められていたライフコースを歩んでいたが、孫世代は多様化してきている。また、ライフイベントの順番が必ずしも一定ではない。自分の職業を持つのは子育てが終わってからと考える人もある。早く、子どもを産み終えて、自分の人生を歩もうという意識の芽生えかもしれない。親世代では子どもを産んで育てるのが主な仕事であった。子世代は子どもは少なく産んで、よりよく育てる、であった。孫世代は計画的に自分の長い人生を見渡して、子育てや仕事ばかりでなく、余暇の使い方にも配慮した生活を考えているようでもある。これから女性の生き方がどのように変るかを知る一つとして、多様なライフコースの背景を探ることも重要であろう。

事例の分析からも、さまざまな人の一生がみえてきた。ここでパターン化するのも困難なくらいである。子世代はサンドイッチ世代であった。しかし、それを強調する人もあれば、そうでもない人もいたがその時代を生きてきた共通の経験が反映されている。少子化や晩婚化、長寿化といった人口的变化は明らかであり、これらが女性の人生に大きく影響している。長寿化を促し、少子化をくいとめることは難しい。社会は全体としてさまざまに影響し合いながら相互に関連して変化をしている。一人ひとりの人生も個人の意志で選択できる範囲とそれが不可能なところがあることをこれらの分析は語っているようである。一人ひとりの人生の歩みにその時代、社会の実態が反映されている。

付 記

本稿は既に報告をしている「農村直系制家族の変動と展開」(山梨県立女子短期大学紀要第16号)、1983年:「家族意識の変化と「家」の継承」本学紀要、第26号、1993年:「果樹農家における経営の持続と変容」、本学紀要、第27号、1994年など一連のものである。調査の対象、研究資料の性格などについてはそれらに記してあるので参考にして頂くとして省略させてもらった。本稿の基礎的資料は森岡清美先生を中心とする共同研究のものである。なお、本稿の主な追加資料に関しては、著者らの責任で行ったことをお断りしておきたい。

主な参考文献(共同研究報告以外の文献)

- 菅谷よし子「世代間関係とライフコース分析」(宮城学院女子大学研究論文集第62号)1982年、1p～13p
 菅谷よし子「同居生活の世代的変化」(宮城学院女子大学研究論文集第63号)1983、22p～55p
 菅谷よし子「コミュニティ」82、ササニシキの村に生きて、財団法人、地域社会研究所、1988
 菅谷よし子「ライフコース研究と生活史法」(宮城学院女子大学研究論文集73号)1991年、19p～42p
 袖井孝子「農村女性の生活と意識」[人文科学紀要]第38巻(御茶ノ水女子大学)1985年123p～146p
 森岡清美、青井和夫編著「ライフコースと世代」(垣内出版株式会社)1985
 経済企画庁国民生活局編「新しい女性の生き方を求めて」大蔵省印刷局、1987

(1997年1月8日受理)